埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Ma Ling-pang: “A Continuation of the Record of the Qazaqs' Migrations to Gansu Province,” 1 (3, 4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤坂, 恒明 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1121

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

翻訳

馬鈴梆「哈薩克入甘続記」第一章第三・四節

Ma Ling-pang: “A Continuation of the Record of the Qazaqs’ Migrations to Gansu Province,” 1 (3, 4)

赤　坂　恒　明　訳
AKASAKA, Tsuneaki

解説

前号に引続き、馬鈴梆「哈薩克入甘続記（カザクの甘粛流入続記）」第一章「哈薩克（カザク）と蒙・蔵両族の紛糾」（月刊『新西北』第七巻 第二、三期合刊、中華民国三十三年（1944）、一〇一～一一〇頁）を訳出する。

今回、訳出するのは、第三節と第四節（一〇三～一〇六頁）である。

第一節と第二節で言及された、中華民国三十年（1941）10月[1]のカザク人による住民殺害事件、「東海子事件」の後、被害に遭った黄ユグル人 —— 現、裕固族。当時、「蔵民」の一部として「黄番」と呼称された —— の社会は、自己変革を遂げるに至った。

「東海子事件」以前、すでに甘粛省の「蔵民」、すなわち、「黄番」（黄ユグル人）と「黒番」（チベット人）の居住区には小学校が設立され、初等教育が始まっていた。しかし、「蔵民」の知識人には、チベット語の読み書き能力はあっても、漢語を知る識字者が極めて少なく、官庁に上申する各種公文書の作成等、「東海子事件」への対処に、非常に難儀した。そのため、「蔵民」の間に、近代社会に適応するためには新しい知識を積極的に得る必要がある、という自覚が強まった。

折よく、中華民国の当局は「西北幹部訓練団第一辺疆青年訓練班」を酒泉に設立し、地域の人材を育成するための活動に着手し、「蔵民」の青年に勧誘活動を始めたところであった。これに、多くの「蔵民」青年が呼応した。

また、更に広範囲に拡大したカザク人による侵掠への対策のため、「蔵民」の間に「自衛隊」が組織された。今回、訳出する第三節・第四節では、そこに至るまでの事情が述べられている。

「自衛隊」の設立に尽力したのは、チベット仏教の転生僧、第七世顧嘉堪布（グジャケンポ）gujia khenpo[2]（本名、羅桑青利嘉木錯（ロブサン・ティンレー・ギャムツォ）blo bzang 'phrin las rgya mtsho. 1897-1943）である。

「中華民国期 祁連山一帯の蔵民の現代小学教育の開創者[3]」として名高い第七世グジャケンポは、社会的大変動に直面した「蔵民」の安寧のために八面六臂の活動を行った。本「哈薩克入甘続記」にも述べられているように、彼は、「東海子事件」とそれ以降のカザクの寇掠への対処のため、行政当局・軍当局との折衝において主導的な役割を果たした。

グジャケンポは、当初、「徙哈論」（カザクを移す論）を提唱して、中華民国の行政当局・軍当局に、「蔵民」居住区に移住したカザク人を他地域に再移住させるよう、働きかけた。しかし、行政当局・軍当局の反応ははかばかしくなく、カザク人の侵掠は、依然、止まなかった。

そこで、グジャケンポは、より現実的な「自衛論」を提唱するに至り、「蔵民」の意思をとりまとめ、「蔵民」を武装させるため、当局に銃器の発給を求めた。

ついに軍当局は、積極的なカザク対策に乗り出した。これによって、多くのカザクは他地域に移り去り、甘粛の「蔵民」とカザクとの紛争は、ようやく減少することとなった。

ただし、これはカザク側にとっては、軍当局による弾圧が強化されたことを意味する。甘粛各地で行

キーワード：ユグル、裕固族、カザフ、甘粛省、中国少数民族問題
Key words ：The Yughurs, Yugu zu, The Kazakhs (Qazaqs), Gansu province, problems of ethnic relations in China

われたカザクによる寇掠は、一部のカザク人による非法行為であったが、多くの移住カザク人が、「東海子事件」以前より、抑圧された苛酷な状況下に置かれていたことは、カザク側の文献からも明らかである[4)]。追い詰められつつあった移住カザク人をめぐる環境が更に悪化したという実態をも、我々は認識する必要がある。

ところで、著者、馬鈴梆について、北京大学歴史学系の党宝海先生より、『夏鼐日記』、夏鼐「甘肅考古漫記」、夏鼐「《隴右金石録》補証」の記載から、「馬鈴梆は馬寧邦の筆名（ペンネーム）であり、彼はモンゴル語がわかり、《大元粛州路也可達魯花赤（イェケ・ダルガチ）世襲之碑》の最も早い研究者である」との御教示を賜わった。すなわち、『夏鼐日記』1944年５月10日条[5)]、および、夏鼐「甘肅考古漫記」[6)]に、蒙蔵委員会の馬寧邦が、河西に来て既に十年近くになり、歴年、南山・北山の蒙蔵部落中において調査業務を行っている、と述べられており、『夏鼐日記』1944年５月12日条[7)]に、「馬寧邦君の《哈薩考》及び《哈薩入甘記》を閲読す」とある。この「哈薩入甘記」は、言うまでもなく馬鈴梆の著述、「哈薩克（カザク）入甘記」に他ならず、馬鈴梆が馬寧邦と同一人であることが明らかとなる。また、夏鼐「《隴右金石録》補証」（二十四）酒泉東門蒙古文碑（巻五第九十葉）[8)]において、馬寧邦は、当該の碑文は蒙古（モンゴル）語でなく畏兀（ウイグル）兒語であり、また、酒泉文殊山の泰定重修文殊寺碑（巻五第五十七葉）の碑陰の文字も同様であると夏鼐に指摘した由が記されている。

馬寧邦は、民国二十四年（一九三五）夏、南京の中華民国国民政府が蒙蔵委員会のもとに調査室を帰綏、寧夏、酒泉、西寧、西康に設置した際に、酒泉に派遣された。蒙蔵委員会編「蒙藏委員會職員表（民國二十五年）」[9)]に、馬寧邦は蒙蔵委員会［駐］酒泉調査組調査員の筆頭に挙げられている。民国二十五年（一九三六）の時点では酒泉調査組の「組長」は欠員であるので、馬寧邦は、調査組において主導的な立場にあったと考えることができよう[10)]。

さて、ここに訳出される「哈薩克入甘続記」第一章の第三節・第四節は、鍾進文 主編『中国裕固族研究集成』（北京、民族出版社、2001年11月）530～531頁に全文が収録されているが、誤植・脱落が少なくない。また、甘粛省図書館書目参考部 編『西北民族宗教史料文摘』甘粛分冊（蘭州、甘粛省図書館、1984年10月）252頁に、第三節の冒頭の部分のみ、第一節の末尾に相当する箇所に移されて挿入されているが、第四節は全く収録されていない。したがって、前号に訳出した第一章第一節・第二節と同様、我々は、『新西北』誌に所載の原典に当たる必要がある。

なお、原典では改行が少ないので、訳文では、原典における段落部分は１行分を空け、適宜、改行を施した。また、文中に原語のラテン文字表記を添えた部分もある。

注

１）前号190頁右14行に「中華民国二十八年（1939）」とあるのは「中華民国三十年（1941）」の誤りであるので訂正する。また、同190頁右２頁の「の重慶政府」は「国民政府」に、193頁左20行の「三十年（1940）」は「三十年（1941）」に、同193頁右１行の「二十九年（1939）」は「二十九年（1940）」に訂正する。

２）第七世グジャケンポは、光緒二十三年（1897）十一月八日、大河石灰関にて、「黒番」（チベット人）の索南彭楚（ソナム・プンツォク） bsod nams phun tshogs の子として生まれた。漢名は強福英。母は「黄番」（黄ユグル人）の亜拉噶（ヤグラカル）家の安氏の東科爾（ドンコルジル）鬐兒。幼時よりチベット語と西部ユグル語に通じていた。四歳の時に第六世グジャケンポの転生として認定され、慈雲寺に入寺した。光緒三十二年、九歳で馬蹄寺に入り、仏教経典研究を修学し、民国三年（1914）、十七歳で佑寧寺（現、青海省互助県に所在）に到り、土観呼図克図（トゥカン・ホトクト） thu'u bkvan qutuɣtu のもとに師事し、モンゴル語とチャガン・モンゴル語（モングオル語。現、土族語）に習熟した。民国十一年、二十五歳の時に慈雲寺に戻り、土観（トゥカン）活佛に、紅湾寺、慈雲寺、蓮華寺、西蔵寺、文殊寺の法台を委ねられた。以後、仏法興隆、社会福祉、小学校の建設等、さまざまな活動を行い、「蔵民」のみならず漢人等からも大いに尊崇された。カザクによる侵掠への対処に東奔西走し、心身ともに疲れ果て、四十六歳の働き盛りの年齢で、民国三十二年（1943）中秋、酒泉の鐘楼寺で円寂した。彼の事績については、馬鈴梆「顧嘉堪布傳 —— 祁連山

藏民教育創始者」（月刊『新西北』第七巻 第七、八期合刊, 1944年. 鍾進文 主編『中国裕固族研究集成』（北京、民族出版社、2001年11月）pp.467-474 に収録）の他、高自厚「試析顧嘉堪布的宗教思想 ―― 兼談宗教界人士爲四化建設作貢献問題」（『甘粛民族研究』1986年第４期, 1986年. 鍾進文 主編『中国裕固族研究集成』pp.207-211 に収録）、丁虎生「顧嘉堪布和他的民族教育思想」（『民族教育研究』1993年第２期, 中央民族大学民族教育研究雑誌編輯部, 1993年７月）、賈学鋒「裕固族藏傳佛教活佛轉世制度初探」（『河西学院学報』第30巻第３期, 2014年６月）等に述べられている。なお、《裕固族簡史》編写組『裕固族簡史』（中国少数民族簡史叢書）（蘭州, 甘粛人民出版社, 1983年９月）の57頁に、「裕固族開明上層人士顧嘉堪布也對国民党反動派分裂裕固族和唆使丁姓恶覇地主侵占裕固族草原的行徑, 進行過合法鬪爭, 爭回了草原。他還在裕固族地区興弁学校, 做過抗日愛国宣傳活動, 對裕固族地区的進歩事業做出了一定貢献」とあるが、これは1980年前後における「公式見解」と理解すべきものであろう。ちなみに、早稲田大学図書館所蔵の、中国科学院民族研究所甘粛少数民族社会歴史調査組 編『裕固族専題調査報告滙集』（甘粛少数民族社会歴史調査組, 1963年）には、これとは対照的な評価がなされている。

3）丹珠昂奔等主編『藏族大辞典』（蘭州, 甘粛人民出版社, 2003年２月）p.281「顧嘉堪布」

4）例えば、《新疆哈薩克族遷徙史》編写組 編『新疆哈薩克族遷徙史』（烏魯木齊, 新疆大学出版社, 1993年12月）、《阿克塞哈薩克族自治縣概況》編寫組／《阿克塞哈薩克族自治縣概況》修訂本編寫組『阿克塞哈薩克族自治縣概況（修訂本）』（国家民委《民族問題五種叢書》之三, 中国少数民族自治地方概況叢書（修訂本））（北京, 民族出版社, 2008.10）等を参照せよ。

5）『夏鼐日記 卷三 1942-1945』（上海, 華東師範大学出版社、2011年８月）186頁, 1944年５月10日条に、

余旋至蒙藏委員会之馬寧邦君處, 馬君出其所得：明正德五年四月十三日諭賜哈密忠順王速檀拜牙郎的詔書和礼單, 咸豊至民国三年金塔協轄下紅崖堡黄番呀喇嘎副頭目的不(ママ)承襲档案, 康熙三十七年起的副頭目家譜（據云, 前明之档案被請清初政府收取而去, 故世系不明）。馬先生来河西已近十年, 歴年在南山北山的蒙藏部落中做調査工作。後与馬君同往訪鄕紳崔崇桂（德斎）先生, ･････

とある。なお、「哈密忠順王速檀拜牙郎」の「郎」は「即」とあるべきものである。速檀拜牙即（スルタン･バヤズィド sulṭān bāyazīd）は、東方チャガタイ系の最後の哈密王。正德元年（1506）に忠順王を襲爵し、正德八年（1513）、モグーリスターン汗国東部のトルファン王マンスール･ハン manṣūr xān に帰順した。これにより、哈密はイスラーム勢力の支配下に入り、ウイグル仏教は、東トルキスタンにおける最後の拠点を失うこととなった。

6）夏鼐「甘粛考古漫記」（『夏鼐文集』中册, 北京, 社会科学文献出版社, 2000年９月, pp.223-276＋圖版３-20～３-26）237頁に、

又在蒙藏委員会的馬寧邦先生處看到他所藏的明正德五年四月十三日諭賜哈密忠順王速檀拜牙郎【即】的諭書和礼單, 由咸豊至民国３年金塔協轄下紅崖堡黄番呀喇嘎副頭目的承襲档案, 包括一册自康熙三十七年起的副頭目家譜。馬先生来河西已近10年, 歴年在南山北山的各蒙藏部落中做調査工作。他談起這十年的工作經驗, 滔滔不絶, 津津有味。

とある。

7）『夏鼐日記 卷三 1942-1945』（上海, 華東師範大学出版社、2011年）187頁, 1944年５月12日条に、

閲馬寧邦君之《哈薩考》及《哈薩入甘記》。

とある。

8）夏鼐「《隴右金石録》補證」（閻文儒、陳玉龍編『向達先生紀念論文集』烏魯木齊, 新疆人民出版社, 1986年１月, pp.49-63. 再録:『夏鼐文集』中册, 北京, 社会科学文献出版社、2000年９月, pp.159-170）pp.57-58.

9）中華人民共和国の国家図書館所蔵。楊鈞期「蒙藏委員会駐寧夏調査組活動述論」（『寧夏師範学院学報（社会科学）』第37巻第５期, 2016年10月）p.43所引。

10）なお、馬寧邦については、張輝口述、青野整理「国立粛州師範国文教師馬寧邦」（『酒泉文史資料』第十四輯）があるというが、未見である。

訳文

馬鈴梆「哈薩克(カザク)入甘續記」

第一章　哈薩克と蒙・蔵両族の紛糾

第一節　東海子事件

（前号に訳出）

第二節　東海子事件の結着、および、その影響

（前号に訳出）

第三節　黄番の受禍、および、顧嘉堪布（グジャケンポ）が徙哈論を提唱する

［中華民国］三十年（1941）十二月六日、蒙蔵委員会の呉忠信委員長が、酒泉の蔵民の代表、顧嘉堪布（グジャケンポ） gujia khenpo、馬羅漢、安立国、安緒龍等、十九人のもとに到った。そこで、［彼らは］哈薩（カザク）の擾害の情況を次のように述べた。

目下、哈薩（カザク）は東柳溝（また東流溝とも表記する）の、紅湾寺を隔てること三里、慈雲寺を隔てること五十里［の地］に居住している。

最近、半年来の統計では、［カザクは］蔵民の馬二百七十五匹を強奪し、牛二十二頭、羊百五十二匹を屠殺して食い、人三名を殺し、東海子に入り蔵民二十三人を殺し、漢民九名を殺し、紅水壩の採金所に入り、金を採掘する工夫十余名を殺した。

直接会って呈上する以外にも、また、「哈薩（カザク）を駆逐して蔵民［地区］の境に出し、以て蔵民の生命を維持するよう申請する事」を、文章を整えて送付呈上した。

その文末にいわく。

「哈薩（カザク）が居る紅湾寺附近は、地形が重要であり、四方に出て害をなすことができる。南は黄韃子峡に到り、討来（トーライ）川に入ることができる。東は康隆寺の東の水関口峡に到り、やはり討来（トーライ）川に入ることができる。また東は黒河上流に通じることができる。西は慈雲寺の南の水関口に到り、やはり路があって討来（トーライ）川に通じる。北は梨園口、高台新壩東、西海子および金佛寺等の地に至る。もし哈薩（カザク）を駆逐する申請を上申しなければ、賀郎噶（ホランガト）家、亜拉噶（ヤグラカル）家、五個馬家、八個馬家、羅爾（ロル）家、大頭目家、東八個馬家、羊噶（ヤンガ）家、四個馬家、石灰関黒番、馬蹄寺の東南の十四小族、および、三山口の東楽克（ドンナク）部は、ことごとく、足を立てる地が無くなろう。さらに［カザクは］、採金所の作業を妨害し、漢人と蔵民との通商に影響し、後方の交通を擾乱するであろう……」

呉委員長は面前で、書面で回答した。

「中央へ戻り、詳細に検討する」。

かの堪布（ケンポ）等十九人は、また、同様の呈上文を第七区行政監査専門員官署に送り届け、［その呈上文の］最後の一段で、「専門員が詮議して、陸軍第一百師団の師団長に、哈薩（カザク）を駆逐して原籍［地］に帰して害を除くことを下命するよう、転請する」ことを祈求した。

専門員 兼［第七］区保安司令の曹啓文は、［呈上文の］原文を駐甘州第一百師団司令部に転送した。師団長の韓起功は返信して言った。

「本［師団司令］部は移転するよしがなく、かの［第七区］保安司令部は、自ら酌量して処理せよ」。

顧嘉堪布（グジャケンポ）の主張を、私は「徙哈論【カザクを移す論】」と名づけた。［クジャケンポは自論を］各関係機関の長官に対して申し述べただけでなく、著名人たちに対しても口頭の談話をした。

「ただ哈薩（カザク）が蔵人【蔵民】の境界内に居ないでいさえすれば、一切すべて協議できます。馬が無くて遠くへ移ることができなければ、我が蔵民は馬を出して彼らを助けます。羊が無くて生活できなければ、我が蔵民は羊を出して彼らを助けます。旅費と食糧が無ければ、我が蔵民はよろこんで銭を出し粮を出して、それによって彼らを助けます。我が蔵民は、彼らに対して全く手の打ちようがありません。ただ哈薩（カザク）が遠くに去ることを望むのみです」。

その言葉は、いたみ嘆きつつも上品な中に悲しみを湛え、憤り恨みつつも悲しみ憂い、おとなしく善良にして仏を好む蔵民の一般の希望を代表しているといえよう。

第四節　顧嘉堪布（グジャケンポ）が重ねて訴え呼びかける

［中華民国］三十一年（1942）一月、哈薩（カザク）が黄番の区域に分布している状況は、次のとおりであった。

西八個馬家（部落）に所属する紅湾寺の東柳溝に住む哈民【カザクの民】、一百七十五戸。

四個馬家に所属する駱駝脖子[1]に住む哈民、一百家。

四個馬家に所属する拉蓋板に住む哈民、八十戸。

四個馬家に所属する黒牙溝に住む哈民、二百戸。

合計、五百五十五戸。

［民国］二十九年（1940）および三十年（1941）、甘州駐留軍は派兵して入山し［カザクを］鎮撫し、紅湾寺と青龍寺の各一中隊を計り、ならびに、駐留軍によって哈薩（カザク）の頭目を委任して五個保長にした。駐留軍が山中にあった時点で、掠奪事件は既に少な

くなかった。

［民国］三十一年（1942）旧暦[2]正月三日、第一百師団の二中隊の兵士が完全に撤退し、哈薩（カザク）は更に猛威を振るった。

三十一年（1942）二月、顧嘉堪布（グジャケンポ）が私に向って面談したところによると、

「駐留軍が撤退した後、もともといた五百五十五戸の哈民を除くほか、また大馬営附近より移って来た哈民二百余家［があり］、目下、分布の情況は次のとおりです：

康隆寺、

長干河、

四個馬家、

羅爾（ロル）家、

西八個馬家、

黄韃子峡[3]

の地。

五個馬家、羅（ロル）家[4]、および四個馬家の損失した馬匹は、およそ見積って原有の定数の十分の三です。ただ西八個馬家の頭目 安緒龍のみが銃を四丁、持っており、民衆を率いて抵抗し、損失はまだ小さいです」。

かの堪布（ケンポ）もまた、「徙哈論」が、ただわずかに希望をかけるのみであり、必ずしもただちに実現できるとは限らない、と知っていた。また、安緒龍の自衛の方法が頗る実効を収めているのを見て、ここにおいてまた、「自衛論」を提唱した。

二月、粛州の駐留軍の騎兵第五師団長 馬呈祥に銃十丁を借りて（按ずるに、この銃は［民国］三十一年（1942）四月に返却された）、受領し、自衛隊を組織した。

三月二日、蘭州の谷主席[5]に電報を呈上した。その文にいわく。

「甘州南山の紅湾寺と康隆寺の一帯は、哈匪が猛威を振るい、人を殺し財物を掠奪し、禍いをなすことが甚だ烈しい。銃弾を発給して蔵民をして自衛せしめ、並びに哈薩（カザク）をして討来（トーライ）河の上流に移動させることを懇請し、もって民衆の困苦を述べる」。

同時に、第七区専門員官署に、いくつかの事を上呈して請願した。その一にいわく。銃弾を発給し、蔵民をして自衛せしめる。その二にいわく。一人の有能な幹部人員を派遣して、武装警察十名を率いて山中に駐在させ、一方では治安を維持し、他方では近くで蔵民を指導する。

顧氏【グジャケンポ】が山に戻った後、前後して二件の報告が寄せられてきた。

その一にいわく。

「陰暦二月十八日、賀郎噶（ホランガト）家は馬四十五匹を失い、蔵哈両方が開戦し、蔵方が馬三十一匹を奪回し、弾丸百六十発を消耗した。同月二十二日、水関口で衝突が発生し、蔵民の死者は三人、銃三丁を失い、負傷者は一人、哈匪に捕虜として連れ去られたが逃げ戻った者は二人、このたびは馬二十三匹、牛十七匹を失った。陰暦三月三日、亜拉噶（ヤグラカル）家の人民の巴士斤（バシチン）は馬三十六匹を失った。同月七日、五個馬家の柴旦瓦斯（ツァイダンワス）は馬二十二匹を失い、蔵民の一人、賀第国が殺害された。十一日、八個馬家の柴因斯担（ツァイインスタン）は犛牛（ヤク）[6]三十三頭を失った。十六日、羅爾（ロル）家の人民の段巴斯（ダンバス）は犛牛（ヤク）[6]四十頭、羊三百頭を失い、負傷者は一人である」。

その二にいわく。

「八個馬家の蔵民の口頭報告に拠ると、さきほどの水関［口］の蔵民三人を殺傷した事件は、匪賊の首領が哈民の青凸里（チントゥリ） *čiŋ tuli 大娃（長子）、および、あだ名を小鉄匠という者の二人であり、甘州の韓師団長の招撫を経て、西八個馬家地方に居留している。図らずも二人の本性は改め難く、二十余人を率いては四方に出て強奪を行い、前に「一排松」において馬十余匹を掠奪した。最近（陰暦三月末を指す）また、長溝寺で史喇嘛（ラマ）の馬二十五匹を、亜拉噶（ヤグラカル）家の杜圏頭の馬三十六匹を奪い去った」。

陰暦三月二十二日、哈薩（カザク）が群れを成して酒泉南山の三山口一帯を往来し、蔵民の馬正有、郎正熊は羊三百余頭、騾馬二十三頭を失った。ここにおいて祁連西部の黒番は驚き恐れた。

五月八日、東は黒河まで、西は酒泉・嘉峪関南面までの、全ての蔵民が、合同で第七区専門員官署に、「上官に、銃器を発給し、自衛隊を組織して哈匪より防護し、以て生命を保護するよう、転呈する事」

を呈上して申請した。

その文に曰わく。

「蔵民の分布の地は、東は黒河の東西岸に到り、西は青頭山に到り、牧畜を生業となし、安居してなりわいを楽しんでいる。図らずも近年、哈匪が反乱を起こすことがあり、牲畜を強奪し、蔵民を殺傷している。牧民はおとなしく善良であり、手を束ねて斃れるのを待つ[のみである]。代表して身に牧民を指導する責任を担う[以上は]、敢えて坐視することができない。調査・確定し、各頭目に自衛隊を組織するよう指令し、並びに上官に銃弾を発給することを許可するよう請うことを転呈するよう、文章を整えて呈上・申請する。……」

文末に署名した代表は、顧嘉堪布（グジャケンポ）、馬羅漢、安緒龍等であり、並びに、頭目名簿 一紙を附した。[頭目名簿の] 抄録は、次のとおりである：

賀郎噶（ホランガト）家の頭目 闡拉什（ナオラシ）
亜拉噶（ヤグラカル）家の頭目 安進朝[7)]
五個馬家の頭目 柴旦瓦斯（ツァイダンワス）
西八個馬家の頭目 安緒龍
羅爾（ロル）家の頭目 沙爾道
康隆寺の大頭目 貢布什加（ゴンプジャ）[8)]
四個馬家の頭目　（管家代行）
羊噶（ヤンガ）家の頭目　（管家代行）
東海子の亜拉噶（ヤグラカル）家の副頭目 安維嶽
西海子の賀郎噶（ホランガト）家の副頭目 噶成才
酒泉 三山口の東樂克（ドンナク）部の頭目
（大頭目は既に廃され、三人の小頭目が毎年、交替した）
甘黄壩[山]口の頭目、李福成
磁窰口【金佛寺山口】の頭目、李得先
卯来泉[山]口の頭目、李壽山
酒泉県直属の第一保の保長 佘登元

以上の名簿によって、蔵民全体の動員・団結・禦哈【カザクを防禦すること】の精神を知ることができる。

[民国]三十一年（1942）二月、もともと甘州に駐屯していた第一百師団の師団長 韓起功の部隊が青海に移駐し、騎兵第十師団によって防衛任務は引き継がれた。

五月、もともと粛州に駐屯していた騎兵第五師団の師団長 馬呈祥が柴達木（ツァイダム）に移駐し、新たに編成された十八旅団によって防衛任務は引き継がれた。

駐留軍は皆、甘粛省政府の意見を尊重し、並びに第八戦区司令長官部の命令を承けて、適切に防備し、並びに手立てを講じて招撫した。同時に哈薩（カザク）もまた移動して、甘州南山に留居する者は僅かに六十余戸のみであった。この時、蔵哈の衝突は比較的少なくなった。

訳注

1）「脖子（bózi）」。「くび」の意味。原文には「孛子」とあるが、集成の「脖子」の方がより適切であろう。
2）原文は「廃歴」。中国では、中華民国元年（1912）より旧暦（時憲暦）を廃止してグレゴリオ太陽暦に切り替えた。
3）原文に「黄韃子長」とあるが、集成に従って改める。
4）原文に「羅家西」とあるが、「西」は衍字か。
5）谷正倫（1890～1953）。1940年12月～1946年10月、甘粛省主席。熊宗仁「谷正倫」（李新、孫思白 主編『民國人物傳』第八巻（中華民國史資料叢稿）北京, 中華書局, 1996年）。
6）原文と集成には「犂牛」（役牛）とあるが、意を以って改めた。
7）「裕固」という民族名の提唱者、安進潮のこと。
8）清朝期に「黄番」七族の「総管」を世襲していた安・官布什加。

原文

凡例
・【　】内に校訂注および頁数を記す。
・原典では正字が用いられているが、ここでは、技術上の理由で、俗字を用いざるを得なかった漢字も少なくない。

【原典一〇三頁，集成530頁，文摘252頁】

★第三節【「第三節」集成作「三」】
黄番受禍及顧倡徙哈論【「論」集成作「記」】
☆【★～☆文摘無。文摘では，本節は，冒頭の部分のみ，第一節の末尾に相当する箇所に移されて挿入されている。】

★三十年十二月六日☆【★～☆文摘作「民三十年十二月」】, ★蒙藏委員會吳【「吳」集成脱】委員長（忠信）蒞【「蒞」集成作「派」】☆【★～☆文摘無】【原

典一〇四頁】酒泉藏民代表顧嘉堪布★，馬羅漢，安立國，安緒龍等十九人，而述哈薩擾害情形如下☆【★～☆文摘作「等稱」】：目前哈薩居東柳溝，★（亦作東流溝【「溝」集成作「講」】）☆【★～☆文摘無】距紅灣寺三里，距慈雲寺五十里。近半年來【「來」集成無】統計：搶奪藏民馬二百七十五匹，宰食牛二十二頭，羊百五十二隻，殺人三名，入東海子殺藏民二十三人【文摘增「（已志前）」】，殺漢民九名【「名」文摘作「人」】，入紅水壩金廠，殺挖金工人【「工人」集成無】十【「十」集成作「二十」】餘名，★除面【「面」集成作「西」】呈外，又具文投【「投」集成作「接」】呈。「呈請【「請」原作「謂」】驅逐哈薩出藏民境以維藏民生命事。」其文末云：「哈薩居紅灣寺附近，地形重要，可以四出爲害。南至黃韃子峽可入討來川。東至康隆寺東水關口【「口」原文判讀困難】峽【「峽」集成作「閘，」】亦可入討來川。又東可通黑河上游。西至慈雲寺南水關口▲【「▲」集成增「，」】亦有路通討來川。北至梨園口，高台新壩東，西海子及金佛寺等地。若不呈請【「請」集成作「請請」】驅逐哈薩，則賀郎噶家，亞拉噶家，五個馬【「個馬」集成作「个」】家，八個馬家，羅爾家，大頭目家，東八個馬家，羊噶家，四個馬家，石灰關黑番，馬蹄寺東南十四小【「小」集成無】族及三山口東樂克部，悉無【「無」集成作「元」】立足之地，且妨害金廠工作，影響漢藏通商，擾亂後方交通，……」吳委員長當面答覆【「覆」集成作「獲」】：「回到中央去詳細研究。」該堪布等十九人又將同樣呈文向第七區行政督察專員公【「員公」集成無】署投遞，最後一段祈求「專員鑒核轉請陸軍第一百師師長飭令驅【「驅」集成無】逐哈薩仍回原籍而除害。」專員兼區【「區」集成無】保安司令曹啓文將原文轉函駐甘州第一百師司令部，師長韓起功覆【「覆」集成作「復」】函云：「本部無法遷移【「移」集成作「徙」】，該保安司令部，【「，」集成無】自行酌辦。」

顧嘉堪布之説【「説」集成作「德」】，余名之曰「徙哈論」。不僅對各有關機關長官呈述，且對社會人士作口頭之談話：「祇要哈薩不居藏人境内，一切都可商量，【「，」集成作「。」】無馬不能遠徙，我藏民出馬助之，無羊不能生活，我藏民出羊助之，無旅費及口粮【集成增「者」】，我藏民願出錢出粮以助之。我藏民對之毫無辦法，祇望哈薩遠走。」其言慷慨而哀婉，憤恨而悲憫，可以代表馴良而好佛之藏民一般希望。☆【★～☆文摘無】

★第四節【「第四節」集成作「四」】

顧嘉堪布一再呼籲【「籲」集成作「吁」】

三十一年一月哈薩分布於黃番區域之狀況如下：西八個馬家（部落）所屬紅灣寺東柳溝住哈民一百七十五戸。四個馬家所屬駱駝脖【「脖」原文作「孛」。從集成】子住哈民一百家，四個馬家所屬拉蓋板住哈民八十戸。【「。」集成作「，」】四個馬家所屬黑牙溝住哈民二百戸【集成增「。」】共計五百五十五戸。二十九年及【「及」集成作「至」】三十年【集成增「，」】甘州駐軍派兵入山鎮撫，計紅灣寺與青龍寺各一連。【「。」集成作「，」】並由駐軍將哈薩頭目委任爲五個保長。當駐軍在山中時，搶案已不少。三十一年廢歷【「廢歷」集成作「除曆」】正月初三日【集成增「，」】一百師之【「之」集成闕】兩連兵士完全撤退，哈薩更形猖獗。

三十一年二月，據顧嘉堪布向余面談。「駐軍撤退後，除原有五百五十五戸哈民不計外，又由大馬營附近移來哈民二百餘家，【「，」集成作「。」】目前【集成增「分」】布情形【「形」集成作「況」】如下：康隆寺，長干河，四個馬家，羅爾家，西八個馬家，黃韃子長【「長」集成作「峽等」】地，五個馬家，羅家西【「家西」集成作「爾家」】及四個馬家所損失之馬匹【集成增「，」】約估【「估」集成作「占」】原有額數十分之三。惟西八個馬家頭目安緒龍有槍四枝，率領民衆抵抗，損失尚小。」【原文「」」無。集成同。以意補】

該堪布亦知「徙哈論」僅屬希望而已，未必能立即實現。又見安緒龍自衛之法頗收實效，於是又倡「自衛論」。二月【集成增「，」】向肅州駐軍騎五【「五」集成作「王」】師師【「師師」集成作「師」】長馬呈祥借槍十枝，（按：此槍【原典一〇五頁】於三十一年四月歸還），領回組織自衛隊。三月二日【集成增「，」】呈蘭州谷【「谷」集成作「容」】主席一電，【「，」集成無】文曰：「甘州南山紅灣寺【集成增「、」】康隆寺一帶【集成增「，」】哈匪猖獗，殺人越貨，爲禍甚烈，【「，」集成作「。」】懇祈發給槍彈【集成增「，」】俾藏民自衛，並令哈薩遷徙至討來河上游【集成增「，」】以抒民困」。同時向七區專署呈請數事：一曰發給槍彈【集成「、」增】俾藏民自衛，【「，」集成作「；」】二曰派一幹員【集成增「，」】帶武裝警【「警」集成作「驚」】察十名駐山中，一則維持治安，再則就近指導藏民。

顧氏回山後，先後寄來報告兩則。其一曰【集成增「：」】「陰曆【「曆」原作「歷」】二月十八日【集成增「，」】賀郎噶家失馬四十五匹，藏哈兩方開火，藏方奪回馬三十一匹，耗費子彈百六十發。【「。」集成作「，」】同月二十二日在水關口發生【「生」原文難讀。從集成】衝【「衝」集成作「衛」】突【集成增「，」】藏民死者三人，失槍三【「三」集成作「二」】枝，【「，」集成作「。」】▼受傷者一人，被哈匪擄去復逃回者二人，▲【▼～▲集成無】此次失馬二十三匹，牛十七匹【「匹」集成作「頭」】。陰曆【「曆」原作「歷」】三月初三日【集成增「，」】亞拉噶家人民【「民」集成作「我」】巴士斤【「巴士斤」集成作「巴巴斤」】

失馬三十六匹。同月初七日【集成増「, 」】五個馬家柴旦瓦斯失馬二十二【「二」集成作「五」】匹，【「, 」集成作「。」】殺死藏民賀第國一人,【「, 」集成作「。」】十一日【集成増「, 」】八個馬家【原文有「, 」】柴因斯担失犂【犛】牛三十三頭。十六日【集成増「, 」】羅爾家人民段巴斯失犂【犛】牛四十頭, 羊三百頭【「頭」集成作「只」】，受傷者一人。」其二曰【集成増「: 」】「據八個馬家藏民報稱：前次水關【集成増「口」】傷藏民三人一案，匪首爲哈民青凸里大娃（長子）及外號小鐵匠【「匠」集成作「匹」】者二人，務經甘州韓師長招撫，寄居西八個馬家地方，【「, 」集成作「。」】不料二人本性難移, 率領二十餘人四出行刼, 前於「一排松」槍【搶】馬十餘匹。【「。」集成作「, 」】最近（指陰曆【「曆」原作「歴」】三月底）又在長溝【「溝」集成作「向」】寺搶去史喇嘛之馬二十五匹，亞拉噶家杜圈頭之馬三十六匹。」【「」」集成無】

陰曆【「曆」原作「歴」】三月二十二日【集成増「, 」】哈薩成羣來往酒泉南山【「南山」集成無】三山口一帶, 藏民馬正有，郎正熊失羊三百餘頭，騾馬二十三頭【「頭」集成作「匹」】。於是祁連西部黑番驚恐。五月八日【集成増「, 」】東至黑河【集成増「、」】西至酒泉嘉峪關南面所有藏民, 聯合向七區專員公署呈請「轉呈【「轉呈」集成作「呈請」】上峯發給槍枝【集成増「, 」】組織自衞隊防護哈匪【集成増「, 」】以保護生命【「命」集成作「事」】事。」其文曰【集成増「: 」】「藏民分布之地，東至黑河東西岸，西至青頭山，牧畜【「牧畜」集成作「畜牧」】爲生，安居樂業。不料近年有哈匪作亂，搶刼牲畜，殺傷藏民,【「, 」集成作「。」】牧民馴良，束手待斃。代表身負領導牧民之責, 不敢坐視，具文呈請核【「核」集成作「援」】奪，指令各頭目組織自衞隊。並請轉呈上峯准發槍彈【「彈」集成作「枝」】……」末署代表爲顧嘉堪布【集成増「、」】馬羅漢【集成増「、」】安緒龍等，並附頭目名單一紙【「紙」集成作「張」】, 抄錄如左【「左」集成作「下」】:

賀郎噶家頭目閙拉什
亞拉噶家頭目安進朝【「朝」集成作「新」】
五個馬【「馬」集成無】家頭目柴旦瓦斯
西八個馬家頭目安緒龍
羅爾家頭目沙爾道【集成増「（副頭目）」】
康隆寺大頭目貢布什加
四個馬家頭目　（管家代行）
羊噶家頭目　（管家代行）
東海子亞拉噶家副頭目安維嶽【「維嶽」集成作「繼嶽」】
西海子賀郎噶家副頭目噶成才
酒泉三山口東樂克部頭目　（大頭目已廢，三小頭目【「頭目」原作「目頭」】每年更換）

【集成531頁】

甘黄壩口頭目李福成
磁窰口頭目李得【「得」集成作「德」】先
卯來泉口頭目李壽山
酒泉縣直屬第一保保長佘【原作「余」集成作「佘」】登元

【原典一〇六頁】

由以上名單，可見藏民全體動員團結禦哈之精神。

三十一年二月【「月」集成作「日, 」】原駐甘州之第一百師師長韓起功部移駐青海，由騎兵第十師接防。五月【集成増「, 」】原駐肅州之騎兵第五師師長馬呈祥移駐柴達木，由新【「新」原文判讀困難】編十八旅接防。駐軍皆尊重甘省府意見【集成増「, 」】並秉承第八戰區司令長官部命令，切實防範，並設法招撫。同時【「時」集成無】哈薩又遷徙，留居甘州南山者僅【「僅」集成無】六十餘戸耳。斯時藏哈之衝【「衝」集成作「衞」】突較少。☆【★～☆文摘無】

〔謝辞〕 本史料の原文の入手には、北京大学大学院生の張曉慧氏にお世話いただいた。また、中国社会科学院のホショード･チンゲル（青格力）qošud čengel 氏には、漢字で表記されたチベット語アンド（アムド Amdo）方言の人名の解釈について貴重な御示教をいただいた。また、解題中に述べたように、著者 馬鈴梆が馬寧邦の筆名であることを、北京大学の党宝海氏より御教示たまわった。厚く御礼申し上げる。